

## からだとは・病とは(11) 東洋医学的なからだ 鈴木齊観 (齊観堂鍼灸・気功治療院院長)

温補の漢方が盛んで有効な治療となっていない  
かった江戸時代に、徹底的に攻める漢方を創成  
し、難病を治療した人がいた。古方漢方の祖・  
吉益東洞である。抽象的な理論による頭でっか  
ちな漢方が当時主流であった。それに対して、  
深い学問と磨かれた感性を持った東洞は実際の  
臨床経験によって、〈病は全て体内の毒による〉  
という真実を悟得した。そしてその毒を排出さ  
せる為に徹底的に攻めたわけである。

その著書『医事或問』には次のようにある。

陰陽医は、五蔵六腑、陰陽五行、相生相剋の  
事を、書籍にて見覚え、理をもって病を論じ、  
手に覚ゆる事なく、臆見にてするゆえ、反って  
其の術なしやすきよにあれど、実に病を治す  
る事あたわず。

要するに、〈これまでの医者は様々な理論を  
勉強しても、実際のからだを把握できていない。  
抽象理論に当てはめて考えるので、分かった気  
になっているが、効果的な治療ができない〉と  
言っているわけである。現代の漢方は大きく、  
後世派と古方派(古方漢方)と現代中医学の三  
流派に分かれる。ここで批判されている「陰陽  
医」というのは後世派で、この時代の主流であ  
った。現代でも古方派は少ないが、それは治療  
成績によるのではなく、ここでも批判されてい  
るように、後世派や現代中医学は理論的で「分  
かった気に」なれるからである。

東洞は毒の動きにくい難病に立ち向かう為に  
かなり毒性の強い、水銀剤など劇薬も使って治  
療した。その結果、病の根本原因となっている  
毒が排出される激しい反応(吐いたり下したり  
下血したり・・)があり、恐れられた。

東洞の治験を弟子が記録した『けんじゆろく建殊録』から  
一つを意識する。

ある商人には五人の娘がいたが、三人の娘を  
亡くしていた。十五歳の正月になると必ず結核  
を発病し、八月には死んでしまった。四女もや  
はり発病した。何人かの医者に診てもらったが、  
効果なく、痩せ細って死にそうになった。商人  
は古方派の医者を恐れていて、東洞先生に頼む  
ことができず、その娘も亡くしてしまった。

二年後、五女も同じように発病した。商人は  
東洞先生に会いに来て言った。

「古方派がよく病を治していることはもちろ  
ん知っていましたが、劇薬を多く使っているこ  
とを恐れていました。しかし亡くした娘たちを

治療した医者が使った緩補の薬が効いた試しは  
ありません。ぜひ先生に治療して頂きたい。た  
とえ死んでも悔むことはありません。」

そこで先生が診察した。衰弱し手足が萎え、  
熱くなったり寒くなったりを繰り返し、咳が激  
しかった。小青竜湯とコン痰丸を処方した。八  
月になる前に、完全に治ってしまった。

病態に合わせて小青竜湯を使い、動きにくい  
毒を揺さぶる為に、コン痰丸という劇薬を使っ  
たわけである。

現代でも薬という単純に良い物と思われて  
いるが、そうした誤解は今に始まったことでは  
ない。東洞の医説を弟子がまとめた『医断』に  
こうある。

薬は草木にして、偏性の者なり。偏性の気は、  
皆毒有り。此の毒を以って彼の毒を除くのみ。  
古は、薬を以って毒と為す。以って知る  
べきのみ。後世に道家の説、疾医に混りてより、  
薬を以って補気、養生の物と為し、その逐邪、  
駭病の設と為すを知らざるなり。其の本を失す  
と謂うべし。

要するに〈薬とは偏った性質のものである。  
作用が強く毒である。そうであるからこそ病の  
根本原因となっている毒を追い出すことができ  
る。ところが後世になって道教の不老長寿の説  
が医学に影響して、薬が温補の働きをするもの  
と思われている〉ということである。

作用が強い物質であるからこそ、使い方によ  
り、毒にも薬にもなる。毒とするか薬とするか  
は医者の見立てに拠るわけである。朝鮮人参は  
精力剤として有名だが、そうした事を批判して  
いる。精力を高めるのは通常の食べ物であって、  
朝鮮人参はミゾオチがつかえて硬いのを治療す  
る作用があるに過ぎないと。

東洞ほどの徹底した攻める漢方は行き過ぎが  
あったのかもしれない。だが、『傷寒論』という  
古典を病のダイナミックな変化を描いたものと  
して現出させた功績は偉大である。その具体的  
な姿はこの連載の中で既に説明したことがある。  
理論により抽象化されたからだではなく、器械  
的な測定による数値化されたからだでもない。  
五感を研ぎ澄まし、生きてきた経験により見ら  
れる等身大のからだにそこに現れる。西洋医学  
的なからだ観に拘束された現代人にこそ必要な  
ものである。(2004年12月大雪)

参考：『吉益東洞大全集』(たにぐち書店)